

「シンガポール国立大学分析アジア哲学プログラム参加報告書」

京都大学文学研究科1年 岡本聡太郎

今回の派遣で私が経験したことはたくさんあるが、とりわけ4日間にわたって開かれたカンファレンスは非常に有益なものであった。内容としては西谷啓治・バッタチャリヤという二人の哲学者の著作を取り上げて自由にディスカッションするというものであったが、事前に準備して一つのテーマについて学問的な議論をすることが初めてだったこともあり、非常に刺激的な場であった。相手の勢いに押されてなかなか自分から発言できないことも多々あったが、大勢の前で自分の意見を英語で発表する機会が得られたのは非常にうれしいことである。また、教員のみならず学生も積極的に議論に参加し、学問というものが現場でどのように行われているのかを実際に経験することができたのも大きな収穫である。

カンファレンス以外の場では、YaleNUSの学生との交流がよい経験になった。公式の行事があったわけではないが、観光案内をしてもらったり食事会があったりと一緒にいる時間はかなり多く、勉強のことから日常生活のことまで様々な話をすることができた。みな学部一回生ということで、哲学の専門的な話題を持ち出すわけにはいかなかった点がいささか残念ではあるものの、シンガポールの文化や生活についての理解はずいぶん深まった。また、彼らの多くが日本に強い関心を持っていることは少し意外で、具体的に日本のどこが彼らの関心を引いたのだろうと自国について考えてみるきっかけにもなった。

語学面については、滞在中知識や能力の進歩を強く実感した。2週間という短い期間ではあるものの、英語漬けの生活をする中で、実際に外国語を使ってコミュニケーションするということがどのようなことなのか認識が改まったように思う。一口に英語と言っても、シンガポールでは様々な人種の人々が様々な方言を話すこと、じっくり考えながら話すとかえって伝わりにくいこと、想像以上に相手はこちらの英語を聞き取ろうと努力してくれることなど、日本にいてはなかなか気づかないことばかりである。もちろん、これまで習ってきた教科書的な英語だけでは日常会話にとってさえ不十分であるということは知っていた。しかし「このように話せば通じるが、あのように話すと全く伝わらない」というような具体的な知識を得られたことは、これから先どのような職業に就くときでも役に立つだろう。

この派遣は自分の考え方や進路にとって有益な経験を与えてくれた。もちろんこの派遣のおかげで自分が変わったなどということはないが、勉強や生活の上での知見が広がったことは間違いない。海外に滞在して何か活動するという機会は自分ではなかなか得られないので、今後同様のプログラムがあれば積極的に参加したいと思う。